

# シェーカーの独身制は女性の解放か： 19 世紀アメリカの一つの共同体実験

棚 村 恵 子

## 序

アメリカ宗教史の大家、シドニー・E・ミードは、その名著『アメリカの宗教』においてアメリカ独立革命後成立した憲法の「宗教の自由」と「政教分離」の原則は、コンスタンチヌス以来のキリスト教世界の原則であった「宗教の統一こそが国の統一に不可欠である」とする考えを覆す画期的な実験であったと述べている。さらにその実験を可能にしたアメリカの広大な空間の意味を強調し、宗教の統一はアメリカにおいては実質上不可能でもあったといみじくも指摘している。<sup>1</sup>

19 世紀のアメリカでは、宗教の自由の原則に支えられ、西方に拡大していく領土に移動する人々は様々な新しい実験的ユートピア運動を展開した。ヨーロッパでは異端として排斥されたグループが民衆の嫌がらせはあったにせよ、憲法上は合法的に存在が認められた。本論文で取り上げるシェーカー (the Shakers 正式名は The United Society of Believers in Christ's Second Appearing) はそのようなアメリカ社会のダイナミックな変化の時代に成長し、ある程度の成功をおさめた新興宗教団体で、女性の創始者による独身制共同体を形成したこと、他の泡沫グループとは異なり 20 世紀に至るまで比較的長期にわたって存続したことなどの特徴で注目に値する。

シェーカーは、何とんでもその特徴ある家具生産で知られており、今では骨董品として高値で売買されるそれらの家具が、18 世紀イギリスに誕生しアメリカで花開いた宗教団体の産物であることは一般には知られていなかった。ところが、1960 年代に始まったアメリカでのカウンター・カルチャー

の運動の中で、シェーカーの共同体が学問研究の対象となった。特に、女性解放運動の展開とともにアメリカの女性史の捉えなおしが進展し、その中で、フェミニズムの観点からシェーカーに対する関心が飛躍的に高まった。シェーカーへの関心は次の3点である。まず1) 創始者がアン・リーという女性である、2) 男女同数の指導者により運営された独身制の共同体であり、女性が対等な立場を持ちえたこと、3) 神を父、母として唱え、キリストの再臨における女性の役割を意味づける神学をもつこと、以上の特徴によって、団体としては消滅したものの男女平等主義のパイオニアとしてのシェーカーが研究対象として「復活」した。

しかし、1980年代以後は、女性解放運動の進展と変化とともに実証的研究が進み、シェーカー研究もフェミニストの先駆者として評価することから、史料に基づいた批判的研究がなされるようになってきた。その結果、一見進歩的な男女平等主義に見えるシェーカーの生活、組織、神学が実は啓蒙主義的人間観に基づく人権思想とは全く異なる神学による独自の理由づけを持つだけでなく、性別による男女の役割分担に見られる保守性が指摘され、女性解放運動の先駆としての評価が見直されてきている。<sup>2</sup>

本稿においては、とくにシェーカーの中心的制度である独身制に焦点を当て、その成立の根拠となった創始者アン・リーの個人的体験と、その体験に基づき形成された福音理解、そしてその生活化としての男女分離の共同体生活の成立を吟味し、特徴を明らかにしたい。そのことにより、初期シェーカーが現代のアメリカのフェミニズムの先駆的運動ではなく、さらに同時代の女性運動とも関係のない独自の起源と性格を持つユートピア運動体であったことが明らかにされるであろう。

## 第1章 キリスト教史における独身制および性的禁欲

まず、キリスト教史における独身制や性的禁欲の歴史を概観してみたい。

宗教生活における性的禁欲の重要性は、キリスト教に限らず古代より世界中の多くの宗教に見られる。特に宗教儀式を執り行う祭司や巫女の場合には

独身であることが厳しく要求されやすく、宗教的清廉と性的禁欲が結びつけられることはエミール・デュルケームやミルチヤ・エリアーデらによる比較宗教学によって明らかにされている。

旧約聖書創世記においては、男女の創造は神の意志であり、その結合は「生めよ、増えよ、地に満ちよ」の言葉によって肯定され、祝福される。<sup>3</sup>しかし、一方、出エジプト記 19 章 15 節にあるように、シナイ山での神顕現に備えるために衣服を洗うことと性的禁欲を課す教えが見られる。また聖戦に際しても同様のことが要求された。その背景には性的行為を宗教的な「汚れ」とみる思想があると思われる。<sup>4</sup>

新約聖書の福音書によると、イエスは離婚に関する教えにおいて創世記の結婚観を継承し、「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」<sup>5</sup>と述べ、結婚を祝福した。イエス自身は独身であったものの、その弟子たちにはペトロのような妻帯者がおり、結婚そのものを罪惡視することや宗教的「汚れ」と見る見方はない。しかし、新約聖書の使徒パウロによる手紙の中には独身であることの勧めや情欲が制御できないなら結婚するようという消極的結婚論が見られる一方、夫婦をキリストと教会の一体性のアナロジーとして見るきわめて積極的な見解も見られる。新約聖書の中でも文書の書かれた状況によって幅のある見解が見られる。<sup>6</sup>

2 世紀から 4 世紀の古代のキリスト教世界で異端とされたグノーシスの中には、結婚を否定し人間の肉体性、歴史性を否定し、肉体の牢獄から解放たれた霊的あり方を理想とするグループがあったことが知られている。しかし、性的禁欲主義は修道生活を通してキリスト者の理想を体現しようとする古代のキリスト教会に広く存在したと思われる。<sup>7</sup>

4 世紀から 5 世紀の修道院運動の西側ヨーロッパでの展開とともに、聖職者の性的禁欲がローマ・カトリック教会の中で強調された。また、中世の

ローマ・カトリック教会における叙任権闘争において、封建領主のコントロールからの教会の独立のために行われた改革運動により、聖職者の独身制の意味が強調された。12世紀に開かれた第1ラテラン公会議で聖職者の独身制が確定し、今日に至るまでローマ・カトリック教会の特徴的制度となっている。<sup>8</sup>

男性聖職者の独身制を敷く一方、一般信徒に対しては結婚を「 sacrament (秘跡) 」として神の恩寵のチャネルとして尊重するというローマ・カトリックの二重倫理は、一六世紀のプロテスタント宗教改革者たちによって批判された。ルターは、救いの確かさを人間の修道や業によらず、神の恩寵のみによるとし、独身の聖職者が神の前に身分が高く、一般信徒が低いという考えに異議を唱えた。『教会のバビロン捕囚について』の著作の中で、ルターは、結婚を sacrament とはみなさず、この世の制度であると明言している。しかし、神の賜物として理解されるべき結婚生活はキリスト教信仰の養育の場、神奉仕の場として積極的意味づけを与え、自ら妻帯した。プロテスタント教会においては、聖職者と信徒の二重倫理はなく、結婚のステータスによらず、いずれにおいても神の恩寵に応える生活が求められる。<sup>9</sup>

以上、西方キリスト教会における結婚観と性的禁欲の歴史についておおまかに振り返ったが、本稿で取り上げるシェーカーの創始者アン・リー (Ann Lee 1736-1784) は、一七世紀にイギリスでジョージ・フォックス (George Fox 1624-91) が始めたクエーカー (the Quakers 正式名は the Society of Friends) に類似したシェーキング・クエーカー (the Shaking Quakers) と関係を持った。クエーカーの思想はキリストの内体験に中心があるが、性的禁欲や結婚の禁止は主張されない。一方、シェーキング・クエーカーの方は性的禁欲を旨としていた。次章ではシェーカーの創始者アン・リーがどのような理由で後者と関係を持ち独身制こそが「清い」あり方と確信したのかを見ていきたい。

## 第2章 アン・リーの個人的体験とシェーカーの独身制の起源

第1章で述べたように、キリスト教の歴史において性的禁欲と宗教的聖化の結びつきは、ローマ・カトリック教会においては聖職者の独身制という形で制度化された。その理論的根拠は旧約聖書にも見られる祭儀的清さの要求であった。そして、性的禁欲を守る者を宗教的により高次のエリートとみなし、一般信徒に対しては「サクラメント」としての結婚を勧めるという二重の倫理の上にたてられていた。

シェーカーの独身制は一見、ローマ・カトリック教会の修道院に似る組織であったため、反カトリック感情が高まった18-9世紀のアメリカ社会において敵意を起こさせた。しかし、生活上での男女分離、性的禁欲が修道院と類似していても、シェーカーの理論的根拠は全く異なるものであった。それは女性との関係を「不浄」と結びつけた男性の視点からの宗教的聖化の道ではなく、女性の創始者のきわめて個人的体験に基づいた女性の視点からの独身制であったことを史料に即して検討していこう。

その際まず、アン・リーの個人的体験をさぐる史料の限界について述べておかねばならない。シェーカーの創始者アン・リーは1736年、イギリスのマンチェスター生まれの鍛冶屋の娘で、教育の無い、文字も書けない女性であった。そのため、本人の残した文書が皆無である。したがってアンがどのような考えの持ち主であったかは、ひとえに彼女と関係した信徒の証言による以外にない。これはちょうど、キリスト教神学において「史的イエス」をさぐる試みのように「史的アン」を探ることは困難である。新約聖書の福音書に記されたイエスの言動は、ナザレのイエスに出会った人々の証言と伝承を基にしているように、信徒たちに記憶され記録されたアンの個人的体験や言動もまた、教団の指導者たちによって、彼女の死後数十年たってから集められ、編集され文書化された。したがって、これを通してのみアンを知ることが出来るという限界がある。

さらに、シェーカーの創設期においてはアンを中心に10人に満たない小集団であって、セクトタイプの宗教の常として、自分たちの信仰内容を著作

で著すに至らなかった。教団が公の出版物をだしたのは、創始者の死後 25 年が経過していた。アンを知らない第 2 世代の信者のために、教団が公に出版した文書類以外に我々は歴史的なアン・リーに近づくことはできない。アンの渡米以前のイギリスでの前半生と個人的宗教体験に関しては本人が近い信者たちに語ったものが記憶され、かなりの時間が経過され記録された。信者たちが「奇跡的に」記憶を呼び覚まされたとされるそれらのアン証言は信ぴょう性が疑われるだけでなく、出版当時の教団の状況にあわせて形成された創始者像であるかもしれない。このような史料の見解を念頭に置きつつアン・リーの個人的体験をさぐってみたい。

アン・リーが誕生した 18 世紀のイギリス社会では、ピューリタン革命後生まれた幾多のセクト型熱狂的宗教グループが存在した。シェーキング・クエーカーと呼ばれたグループもその一つであり、アンはこの極めて非伝統的なセクトに若いころ接触したと思われる。マンチェスターの英国国教会の幼児洗礼記録によると、アンは 1742 年 6 月 1 日に洗礼を受けている。父ジョンは鍛冶屋であり、貧困ゆえに娘に教育を受けさせられなかったらしい。アンは早くから働き、1762 年 1 月 5 日に父と同業の鍛冶屋アブラハム・スタンデリンと結婚した。この結婚により 4 人の子供が誕生したが、幼くしてすべてを亡くしている。そのうちの娘エリザベスが 1766 年 10 月 7 日に埋葬されたと教会に記録されている。以上が教会の記録から掘り起こすことができる事実である。

アンがいつの時点でシェーキング・クエーカーと接触したかは不明であるが、その疲れ切るまで体を震わせ踊り歌う独特の礼拝がアンにとっては救いとなったのであろうが、マンチェスターの町の為政者たちには騒ぎのもとなり、問題となった。

1816 年に出版された『祝福された我々の母、アン・リーとその長老の生涯、人格、啓示そして教理についての諸証言：これらの方がたを通して永遠の命の言葉はこのキリストの再臨の日に明らかにされた…』（以後 1816Testimonies と略す）はアンに直接教えを受けた第 1 世代の信者たちの

初めての証言集で、アンの語った言葉と奇跡行為が記されている。これによるとアンの宗教的苦悩は次のように表現されている。

「わたしは時に苦悩があまりにも深かったので、夜、床についても休むことができませんでした。そこで、起き上がり歩きました。地獄で目覚めることを恐れて眠ることもできませんでした。眠りそうになったら、指で目を押し開けて地獄で目覚めるよりここで目を開けているほうがまだましだと自分に言い聞かせました。」<sup>10</sup>

若い女性が地獄の罪に震えるほどの罪とはいったい何であろうか。この問いに対しては不思議なことに何の説明もなく、ただ彼女の苦悩が深かったとのみ記されている。この理由として次の3つが考えられる。1) アン自身は信者に対して、自からの苦悩の内容について語ったが、それを証言する信者が覚えていなかった。2) アンは信者に対して罪意識の内容を語り、それを聴いたものが 1816Testimonies の編集者（ルフス・ビショップとセス・ウェルス）に語ったが、編集者の判断で削除された。3) アンは自身の苦悩について全く抽象的にしか周囲に告白しなかった。

シェーカーは罪を具体的に告白することによって振るい落とすこと（shake off）ができると考えていたので、3) の可能性は考えられない。1) の可能性についてはアンの死後、時の経過とともに信者の記憶が具体性を失ったと考えることはできる。しかし、不自然なほどに具体性を欠く、アンの告白から推論して2) の可能性、つまり編集者によって故意に削除されたという可能性を推論してみたい。

アンの個人的経験に関しての教団の最初の公式記述は 1816Testimonies より8年早く、1808年に出版された『キリストの再臨の証言：この終末の日における真の神の教会の信仰と実践に関するすべてを網羅した声明書』（以後『1808 声明書』と略す）である。この文書では教団の歴史が語られ、キリストの再臨がアンにおいて実現したと述べられている。アンの生涯についてはアンが結婚後四人の子供を失ったことが記されている。以下は『1808 声明書』からアンの子供の死に関しての一文である。

「そして（アンは）アブラハム・スタンドレイという名の男と結婚した。これにより彼女は四人の子供を持ったが、すべて幼くしてなくなった。特にこのことにより人類の救いようのない悲惨な状態についての彼女の確信を増すこととなった。」<sup>11</sup>（傍線筆者）

母として妻としての生涯しかありえなかった 18 世紀の女性の経験として、子供の死はアンにとって相当の心理的後遺症を与えたと推察できる。「なぜ神は次々と子供を奪われるのか」「なぜ自分は子供を守ってやれなかったのか」そのような問いと無力感がアンを苦しめたことであろう。子供が次々と死ぬという不毛な結婚生活の中でアンが性的禁欲を説くシェーキング・クエーカーに強く引かれ、性そのものを罪惡視することで「人類の救いようのない悲惨な状態」の解決を図ろうとしたと考えられる。効果的な避妊法がない時代に、さらなる悲劇を避けるには性的禁欲以外に実際にはありえなかった。

しかし、アンの苦悩からの解決の道は、夫アブラハムにとっては同意しかねることであった。アンはその点に関して次のように告白している。

「わたしがジェームズとジェインウォードレイ夫妻を通して明らかにされた神の光にしたがって歩み始めたときのことです。わたしは夫とともに住むことに関して非常に苦しい試練と苦難を感じました。そのことに関して夫妻に助言を求めたところ、ジェインは『ジェームズとわたしは共に住みつつ幼子が触れ合う以上にはお互いに触れ合いません。あなたも家に帰り同様にしなさい』と言った。」<sup>12</sup>

マンチェスターのシェーキング・クエーカーの指導者であったウォードレイ夫妻に助言を求めたアンの悩みは、子供をこれ以上産まないために夫婦の性生活からどう逃れるかであった。このことに関してアンと夫との間でいさかいがあり、やがて夫婦は離別していくこととなる。<sup>13</sup> 夫婦の間の性関係を「肉欲」「罪」と捉える禁欲主義は、子の死の悲しみと空虚をそれ以上味わいたくないアンにとっては救いとなりえた。

この解釈は上に引用した 1808 年の声明書によって裏づけられる。ところが、1810 年に出版された声明書第 2 版（『1810 声明書』と略す）によると



「特にこのことにより人類の救いようの無い悲惨な状態について彼女の確信を増すこととなった」という部分が削除されている。<sup>14</sup> なぜであろうか。それは教団の独身制を神からの直接的啓示によると主張する指導部にとって、アンの女性として母としての個人的経験を土台とするような記述は都合が悪いものであったからであろう。カリスマ的指導者であったアン・リーが死んだあと、シェーカー教団が生き残るためには組織化とともにアイデンティティーを明確にする必要があった。教理や制度の基礎付けをアンが受けた神からの啓示に置くための削除であったと思われる。<sup>15</sup>

それでは、先に引用した 1816 年の公式見解によると独身制の根拠はどのように述べられているであろうか。1816Testimonies によると、アンは神からの啓示で性の罪性を悟ったとされているのである。アンは 1770 年に英国国教会の礼拝妨害の罪で牢に入れられ、その際に獄中でアダムとイヴの幻を見た。その幻を通して、アンはアダムとイヴの性交こそが罪の根源であるという確信が与えられたようだ。また、イエス・キリストが栄光の姿であられ、独身制こそが救いへの道であるという新しい福音を彼女に託したという。<sup>16</sup> 独身制の根拠はアンの見た啓示であるとするこの主張は、おそらく指導部の編集によるもので、先の『1810 声明書』と一致する。こうして独身制の根拠は『1808 声明書』から『1810 声明書』へ、さらに 1816Testimonies へと時間が経過する中で、アンの個人的喪失体験から啓示体験へと強調点が変わっていった。19 世紀のアメリカ社会で生き残ろうとする新興小集団にとって、すべてを「啓示」に根拠付けるほうが正当性を増すとの教団指導部(男性)の考えが反映しているのかもしれない。

アン・リーが母親としての体験にいかにかかわりを持ち続けていたかは、『1808 声明書』に書かれている彼女の回心についての発言から窺える。それによると彼女は宗教的苦闘によって「赤子のように無力」になったが、「(産道)を通りぬけ、霊的王国に生まれでて」回心を経験し「ちょうどこの世に生まれたばかりの新生児のよう」だったと語っている。このほかにも、アンの説教には陣痛 (labor) という言葉が宗教的探求の意味で頻繁に用いられたようだ。

こうして、はじめはアンの個人的苦悩から出発し、性関係からの自由を清い生活としたメッセージを携えて伝道したシェーカーが、アンの死後独身制度をとる共同体へと発展した過程で独身制の根拠をアン・リーの受けた啓示に置くようになったと思われる。アダムとイヴの性的交わりこそが「原罪」だという原罪論に根拠を置く性の罪惡視、その罪からの救いとしての禁欲主義を掲げたシェーカーは、アンの後継者たちによってアメリカ社会で主流派福音主義とは異なる「福音」を伝道し、ある程度の成功を収めた。

以上見てきたように、シェーカーの独身制の起源はきわめて女性的な母としてのアンの喪失体験にあり、その苦悩からの救いというフェミニンな問題意識があったと思われる。

子供をすべて亡くした母であるアンは信者から「マザー・アン」と呼ばれることに満足を覚え、「母なるもの」にこだわり続け信者の霊的な母になる道を目指した。そのアンの母性的関心に起因する性的禁欲の教えをシェーカーの次世代の信者たちはどのようなライフスタイルによって継承していったのであろうか。すべての私的所有を禁じ、平等な共同体を形成した次世代のシェーカーたちの生活を次章で考察してみたい。

### 第3章 シェーカー共同体における独身制の実態

アン・リーの個人的喪失体験に始まった独自の「福音」を携え、アンは8人の信者とともにマンチェスターからアメリカに向かった。1774年にニューヨーク港に到着した一行は、アンのカリスマ性だけを頼りに反英感情の高まる独立戦争期のアメリカにおいて、困難な伝道活動を強いられた。アンは暴徒による怪我がもとで1784年に亡くなった。10年の伝道活動はハドソン川上流のアルバニーに始まり、周辺のコネチカット、マサチューセッツ、ロードアイランドに広がった。その地域は「燃え尽きた地域」(Burned-over District)と呼ばれるように、宗教的リバイバルの火が嘗め尽くした場所である。18世紀末から19世紀前半に、この地域は第2次大覚醒と呼ばれる宗教運動が繰り広げられ、バプティストやメソディストが飛躍的に信徒を増やしたほか、

モルモン、ミラー派、クリスチャン運動など新しいアメリカ生まれの宗教が様々な「福音」を掲げて活発な伝道活動を行った。シェーカーはその一つで、アンの死後に教団の組織化、教理の明確化、共同体の規則化によって生き残っていった。そしてその作業は男性の指導者たちが主に担った。

アンが町から村へ徒歩によって伝道したのに対し、アン亡き後の指導者たちは、信者を一つに集め共同生活をすることに心血を注いだ。それは第一にカリスマ的指導者を失った教団を外部的攻撃から守るため、第二に内部のアイデンティティを明確にするため、第三に経済的効率のためであった。男女一組の長老がファミリーと呼ばれる最小の単位の霊的指導者となり、この長老に対して信徒は罪の告白をすることが求められた。独身制に関してはアンの時代より受け継がれたが、新しく規則によって生活の隅々まで男女の分離が徹底された。その結果、男女の役割分担が明確化され掃除、洗濯、衣類の世話、料理、食物の保存などは女性の仕事とされ、農業、大工、会計、外との交渉は男性の仕事とされた。1821年に成文化された「千年王国の法」には男女の接触を極力避けるために次のような細かい規則が定められた。<sup>17</sup>

- 1 キリストの再臨の福音はすべての私的な男女の交わりを禁ずる
- 2 1人の兄弟（男性信徒の意）と1人の姉妹（女性信徒の意）が用事のための必要最低限の接触以外には二人だけでいてはならない。また必要外に触れてはならない。
- 3 兄弟たちと姉妹たちは共に仕事をしてはならない。長老の許可のもとに特別な場合をのぞいては。
- 4 兄弟たちと姉妹たちは個人的に贈り物をしてはならない。
- 5 階段で兄弟たちと姉妹たちがすれ違うのは、よい秩序に反する。
- 6 家族（信者の最小単位の意）の構成員が同じ家族、または他の家族に廊下や歩道、踊り場で出会っても、用事や伝言のため、あるいは様子を聞くために必要な時間以上立ち止まって話すことはよい秩序に反する。もし、家族内あるいは近隣の家族と長く話す必要が生じたときは建物の中で行うよう教えられている。

- 7 兄弟たちと姉妹たちは正当な規則に適った場合以外は互いの住まいを  
行き来してはならない。
- 8 兄弟たちと姉妹たちは必要な場合を除いては、夜の礼拝の後、互いの  
住まいに入ってはならない。
- 9 兄弟たちが姉妹たちの住まいに入る必要がある際、またはその逆の場  
合、必ず入り口でノックをし、許可された後入室しなければならない。
- 10 姉妹たちがベッドを整理と掃除のために兄弟たちの住まいに入室中  
は、兄弟たちはすべて部屋を出なければならない。
- 11 姉妹たちが畑や納屋、鳥小屋、兄弟たちの仕事場に行く際は、少なく  
とも二人以上で行かねばならない。姉妹が1人でそのような場所に  
行くことは、女性の長老の特別の許可なく、不謹慎とされる。

これらのシェーカー共同体の厳しい規則は、秩序維持のためとは言え、徹底的に男女の愛ばかりか、人間の愛そのものを締め出すものであった。互いを「家族」とし、「兄弟姉妹」と呼び合いつつも肉体を持つ人間性を否定し、徹底的に「霊的」存在として他者と共同体を形成するという実験であった。このような人間のあり方を、アン後のベンジャミン・ヤングら男性理論家たちはキリストの再臨による新しい歴史段階における新しい人間性だと主張した。<sup>18</sup>

シェーカーたちは性を超越した天使的存在であり、自分たちこそ罪を克服した完全に清い存在で、罪に穢れたこの世との関係はたとえ肉親といえども絶つべきであった。しかし、皮肉なことに、異常なほどの細かい規則を定め互いを監視しなければ維持することができないユートピアであった。第2章で考察したように、独身制は子を亡くしたアンにとっては救いにはなったが、アンの教える「福音」の制度化としてのシェーカー共同体は、女性にとって自由や解放となるより、規則による「束縛」となったのではないだろうか。1796年に最高指導者の地位についたルーシー・ライトが直面した問題は、若者の退団、独身制に対する外部からの反感や批判であった。<sup>19</sup> さらに、肉親の関係を否定する教えは、入信者とその家族とのトラブルを引き起こした。

たとえば、1800年にシェーカーの本部があったニュー・レバノンに住む40人以上の市民がニューヨーク州に対して請願を出した。それによると入信した若者が両親や親戚、友達と会うことも連絡することも禁じられているので、自由に会えること、退団が容易になるような法的措置の求めであった。<sup>20</sup> 外の世界に対して閉じた共同体をつくる一方、新しい改宗者を得るために外に向かって伝道せねばならなかった教団にとってこのような外界とのトラブルは手痛いマイナスとなったであろう。反発を受けつつも19世紀の前半には入会者を集め、ある程度の成功を収めたシェーカーの試みを19世紀アメリカ女性史の文脈でどのように評価すべきであろうか。

#### 第4章 19世紀アメリカ女性史の文脈でのシェーカーの実験

これまで見たように、シェーカーの独身制の起源は、女性の経験から出たきわめてフェミニンな問題の解決であった。性的禁欲以外に有効な避妊の手段を持たなかった19世紀のアメリカ女性にとって性の否定、出産の拒否はある種の救済となったかもしれない。しかし、アンの死後のシェーカー共同体は、アンの教えを制度化、組織化し、厳しい男女分離による共同生活を実現させ、「千年王国の秩序」として終末論と結びつけた。アンの女性としての経験や苦悩よりも神からの啓示としての独身制が主張されたがゆえに、家族で入信した信徒たちは肉親といえどもその情愛を交わすことが罪として禁じられ、本来、母の苦悩から出発した独身制が母を苦悩させる結果となったのは皮肉と言わざるを得ない。

シェーカーを男女平等社会の先駆と見る見方についてはどうであろうか。アメリカのフェミニスト神学者、ローズマリー・ルーサーは、シェーカーの独身制について次のように述べている。

「シェーカー、クリスチャン・サイエンス、ペルトン・サンクティフィケーションなどの女性による共同体においては、それ（独身制）は女性に解放的選択を与えた。独身制は女性が男性への依存をかなぐり捨て、自立することを可能にした。」<sup>21</sup>

本稿で検証したように、筆者はルーサーの評価に典型的に見られるような男女平等の先駆者としてシェーカーという見方に賛成することはできない。男女によって構成されたシェーカーたちには「女性の自立」といった現代的な意識はなく、性を罪惡視することによって「天国的な新しい人間」のあり方を目指した。しかし、それが19世紀アメリカ社会の女性たちにとってユートピアを提供しえたのであろうか。シェーカーのユートピアはデモクラシーとは全くことなる原理に基づいた指導者への絶対服従と指導者への罪の告白の義務、そして男女の厳しい分離の原則に縛られた不自由なものであった。また、シェーカーの人間観は神による男女の創造を祝福とみなした創世記や男女の一体性を強調したキリストの言葉にあるような性の祝福ではなく、性の抑圧ではなかったか。それはさらに啓蒙主義的な人間観に立つ近代的人権思想とも全く異なる。男女平等主義というよりは男女分離主義であって、シェーカーの独身制の制度的確立と教理的確立が男性の指導者たちのリーダーシップによっていたことを考慮するとシェーカーの女性たちが19世紀のアメリカ女性たちに比べて「男性への依存を捨て自立」していたと評価することはできない。

また、シェーカーの共同体における仕事の役割分担を見ると、女性たちの仕事は19世紀のアメリカの家庭の主婦となんら変わらず、掃除、洗濯、料理、裁縫であった。ただ、大きな相違は出産と育児から解放されているという点である。しかし、出産と育児の重荷からの解放が、人間の抱く愛情や情愛を犠牲にしなければ手に入らないとすれば、それは真の人間の解放であらうか。<sup>22</sup> シェーカーになった女性たちは、家庭という聖域も持てず、定められた仕事を黙々とこなすことが求められ、母となる苦しみがない代わりに喜びもなく、ひたすら「ファミリー」と称する擬似家族のために奉仕した。確かに性を超越した「天国的」生活は家族の重荷に喘いでいた者、孤独なものにとっては「福音」であったであろう。しかし、その生活が、罪と重荷に満ちた外の世界の女性たちの生活よりも解放的であったとは言いがたい。ユニークなライフスタイルと独特な宗教ダンス、デザイン性に富んだ家具に多くの

見学者が集まったシェーカー共同体は最盛期には全米各地に 18 ものコミュニティがあり、信者数も 6000 人を超えた。しかし、1840 年代をピークに男性や若者の退会者が続き、衰退の一途を辿った。

## 結論

本稿では母性に起因する苦悩からの救いとして出発したシェーカーの独身制が、皮肉なことに母性を抑圧し、したがって女性を解放する方向へと至らなかったプロセスについて史料に即して検証した。シェーカーの独身制こそは、彼ら彼女らのユートピアの中心的制度であったが、その同じ独身制こそが、1840 年代をピークに衰退していく最大の原因であったのではないだろうか。

人間の肉体や男女の愛を罪惡視することによって人間の歴史性を超越しようとしたシェーカーのユートピア実験は失敗に終わった。シカゴ大学で長く教えた教会史家、故ロバート・M・グラント教授がいみじくも述べているように「世界とその歴史的現実を否定するものは、世界と歴史そのものによって否定される」<sup>23</sup> ということであろう。

<sup>1</sup> Sidney E. Mead, *The Lively Experiment* (New York: Harper & Row, 1963)  
邦語訳『アメリカの宗教』日本基督教団出版局、1978

<sup>2</sup> Stephen J. Stein, *The Shaker Experience in America* (New Haven: Yale University Press, 1992)

<sup>3</sup> 創世記 1 章 27-28 節、2 章 24 節。

<sup>4</sup> 出エジプト記 19 章 15 節。レビ記 15 章 16-33 節、サムエル記上 21 章 4-7 節参照。

<sup>5</sup> マルコによる福音書 10 章 6-9 節、並行記事はマタイによる福音書 19 章 4-6 節。後者の場合は「天の国のために結婚しない者もいる」というイエスの言葉が加えられている。

<sup>6</sup> コリントの信徒への手紙 (1) 7 章、エフェソの信徒への手紙 5 章 21-33 節。後者はパウロの著作ではなく後代の作という説がある。

<sup>7</sup> Robert M. Grant, "Gnostic Spirituality" *Christian Spirituality: Origins to the Twelfth Century* (New York: The Crossroad Publishing Company, 1986)

<sup>8</sup> Charles A. Franzee, "The Origins of Clerical Celibacy in the Western Church" *Church History*, 41 (1972), 149-167.

<sup>9</sup> マルチン・ルター (石居正巳訳)『ルター著作集第 9 巻』(聖文舎、1973 年)

- 245–330. ジャン・カルヴァン（渡辺信夫訳）『カルヴァン キリスト教綱要 IV/2』（新教出版社、1965年）、225–230.
- <sup>10</sup> Rufus Bishop ed., *Testimonies of the Life, Character, Revelations and Doctrines of Our Blessed Mother Ann Lee, and the Elders with Her; through whom the Word of Eternal Life was Opened in this Day of Christ's Second Appearing...* (Hancock: Josiah Talcott, Junior, 1816) in Jean M. Humez ed., *Mother's First-Born Daughters: Early Shaker Writings on Women and Religion* (Indianapolis: Indiana University Press, 1993), 29.
- <sup>11</sup> Benjamin S. Young, *The Testimony of Christ's Second Appearing; Containing a General Statement of All Things Pertaining to the Faith and Practice of the Church of God in this Latter-day...* (Lebanon, Ohio: Press of John M'clean, 1808) in Stein, *The Shaker Experience in America*, 459, note 104.
- <sup>12</sup> Humez, *Mother's First-Born Daughters*, 31.
- <sup>13</sup> Ibid, 31.
- <sup>14</sup> Stein, 78. 及び 459.
- <sup>15</sup> シェーカー教団における組織的發展に伴う教理的發展については以下に詳しい。Keiko Tanamura, "Christ's Second Coming in Early Shaker Theology," Master of Arts thesis submitted to the Lutheran School of Theology at Chicago, June 1989.
- <sup>16</sup> Humez, 31.
- <sup>17</sup> Theodore E. Johnson ed., "The Millennial Laws of 1821," *Shaker Quarterly*, Summer, 1967 in Flo Morse, *The Shakers and the World's People* (Hanover: University Press of New England, 1980), 104–105.
- <sup>18</sup> 初期シェーカーの再臨思想におけるアン・リーの位置付けに関しては以下参照。Tanamura, "Christ's Second Coming in Early Shaker Theology."
- <sup>19</sup> Stein, 50.
- <sup>20</sup> Ibid.
- <sup>21</sup> Rosemary R. Ruther, "Women in the Utopian Movements" *Women & Religion in America: The Nineteenth Century* (San Francisco: Harper & Row, 1981), 49.
- <sup>22</sup> フェミニストの立場からシェーカーの保守性をすどく指摘した以下を参照。Majorie Procter-Smith, *Women in Shaker Community and Worship: A Feminist Analysis of the Uses of Religious Symbolism* (New York: the Edwin Mellen Press), 1985.
- <sup>23</sup> Grant, "Gnostic Spirituality," 60.

キーワード

シェーカー、ユートピア運動、独身制